經濟論叢

第七十五巻　第一號

流　民　考……穂積文雄（1）

蒙古民族の社會經濟史的一考察……伊藤幸一（21）

陶磁器業の產業革命（瀨戸と名古屋）……三島康雄（39）

クチンスキー「1800年から1946年に至る
ドイツ經濟の動き」……大藪輝雄（61）

〔昭和三十年一月〕

京都大學經濟學會

蒙古民族の社會經濟史的一考察

——特に元の成立期前後に於ける酒について——

伊藤幸一

一

『蒙古人は酒好きだ』と言われる。[1] 凡そ如何なる民族でも或る種の酒類はもつて居り、又酒類が人に親しまれ、人類生活に關係深い事は、いずれの民族にも共通しているのに[2]、特に蒙古人に對してその言われるのは、何故だろうか。

それは、かれらが過去特に古代に於いて、獸乳酒を非常に愛用したからであろう。ルブルクは、古代蒙古人は如何なる場合でも眞水を飲まなかつたと言つている。[3] そうすれば、これに代る何らかの飲みものが要求されたに違いない。牧蓄民たる彼等[4]に於いて、それが獸乳にも依存するのに不思議はない。ところがこの獸乳は、ただ放置乃至は攪拌されるだけで醱酵して獸乳酒になる。[5] そこには高度の技術はいらない。從つて、牧蓄經濟に入つた蒙古人は、容易に獸乳酒を得る事ができた。また、獸乳酒の中でも特に馬乳酒を造る事は、宗教的な信仰[6]から一つの重要な生業[7]とされていた。だから、少くとも古代蒙古社會に於いては、獸乳酒は必需飲料とは言えない迄も、必需的な飲料と

なつていたものと思われる。

しかし、そんなものが酒と言えるのだろうかと言う疑問が起る。梅棹氏は、ポロチコフが『キルギス人の遊牧生活』に於いて、「キルギス人は非常にクミズを好み、清涼飲料と思つている。キルギス人は、クミズを一ペドロ（六升位）をも飲む事がある」と言つているのを引用して、其の様に多量に飲める酒があつたものではない。それは要するに蒸溜操作によつて、始めて酒になる所の所謂酒のもとに過ぎないとし、結局結論として、馬乳酒は酒ではない。[8] と言つて居られる。

尤も、氏の說は現代の蒙古社會の研究に於いてであるが、それにしても酒と言うものは、果して人の飲み得る分量で決定されるものだろうか。又、蒸溜濟みか否かが、酒か否かを決定する要素なのだろうか。酒に強い人もあれば弱い人もある。又、一概に酒と言つても酒類には色々ある。[9] わざと蒸溜過程を經ずして飲む今日のドブロクは、酒とは言えないのだろうか。今日の學者に依つても、酒と言うものは「酒精」の出來る過程に依つて、單醱酵酒類と複醱酵酒類とに分類して居り、乳酒等はこの前者に該當させ、Koumiss の名も其の中にかかげている。[10] つまりそれは、馬乳酒等の獸乳酒が酒の一種だとみなされているからではなかろうか。

げんに、前漢書卷二十二、禮樂志第二、赤蚊十九に、「給大官挏馬酒」とあり、其の註に、「李奇曰、以馬乳爲酒、撞挏乃成也、師古曰、挏音動、馬酪味如酒、而飲之亦可醉、故呼馬酒也」とある。鄭所南の心史下卷、大義略敍にも、「攪馬乳爲酒、味腥酸、飲亦醉」とある。ドーソンも、馬乳より釀せる酒を痛飲して、之を樂しむと言つて居る。[11] いずれも過去に於いては、この様に馬乳酒を馬乳の範疇におかないで、酒の範疇に入れて『酒だ』と言つている。だから、馬乳酒は酒の一種だと見る方が妥當ではなかろうか。

所がこの酒の一種たる馬乳酒は、さきにも述べた如く、これを造る事が生業と言われる程どんどん造られ、必需飲料と迄言われる程[12]も飲まれた。特に、宴會に於ける彼等の飲み振りはすごく、カルピニは、酒を樂しみ酒に醉う事を名譽の如く心得る蒙古人の居る事を傳えているが、[13]それは今日に於いても、多く飲む者は男としての箔があると言われ、その名殘りを留めている。勿論、そう言う所では爛醉が惡德とはならない。[14]大いに皆の蒙古人は酒を樂しみあい、こうした風が古今變りないのに違いない。こう言う點から『蒙古人は酒好きだ』と言う定評が現在尙存しているのだろう。

この樣に酒好きと言われる蒙古人の、殊に古代蒙古社會に於ける彼等の生活狀態を思うに、それは全く荒漠たる極めて單純素朴なもので、彼等の生産力は非常に低いし、其の生産物と言つても、單純な遊牧經濟の必要なものだけに過ぎない索漠簡素なものであつた。[15]然るに、既述に依つてもわかる樣に、そんな中にあつても酒は彼等の生活に不離のものであつた。從つて、彼等の經濟生活に於いて酒は非常に重要な部門を占めていたものと考えられる。所が、蒙古民族が勃興し、遂に大元帝國を築きあげるのは、こう言う狀態から發展し、成就するのである。では、この過程つまり元の成立期に於いて、彼等と酒の關係がどの樣に進展し、それが蒙古民族の發展にどの樣な關係をもつたであろうか。

(1) 滿鐵經濟調査會「ブリヤート民族の研究」八―九頁・ギルモア「蒙古人の友となりて」邦譯三三八―三四六頁
(2) 山崎百治「東亞醱酵化學論巧」五頁
(3) リュブルック東遊記、邦譯六〇頁
(4) ラシッド・ア・ヂンも「元朝祕史」も、十一二世紀では蒙古人を狩獵・牧畜兩部族に分けているが、森林の民でも乳を食料とした（ウラヂミルツォフ「蒙古社會制度史」邦譯七三頁）

(5) 山崎百治・前掲書・三二頁

(6) 蒙古地帶に於いては數千年の昔から、毎戸必ず馬奶酒を造つて惡靈を退散させるのだと確信している（武井正衛「結核療法としての『クミス』に關する調査」）

(7) 蒙古の祕史・小林高四郎譯註三九頁

(8) 遊牧民族の社會と文化（一九五二年・自然史學會刊）一九九頁

(9) 世界の酒類の醸造方法に依る分類

- 世界の酒類
  - 醸造酒類
    - 單醱酵酒類
      - 葡萄・果實・植物・蜂蜜・獸乳等利用酒類
    - 複醱酵酒類
      - 原料糖化に細菌類利用酒類
      - 原料糖化に唾液利用酒類
      - 原料糖化に溫熱利用酒類
      - 原料糖化に發芽種子利用酒類
      - 原料糖化に糸狀菌類利用酒類
  - 蒸溜酒類
  - 混成酒類

（山崎百治・前掲書・二〇―二一頁）

(10) 山崎百治・前掲書・三二頁

(11) ドーソン「蒙古史」邦譯、岩波版下第二編一三頁

(12) 岩村忍「蒙古史雜考」四頁

(13) リュブルック東遊記・邦譯五七頁

(14) ドーソン「蒙古史」邦譯、岩波版上第一編六二頁

(15) ウラヂミルツォフ・前掲書・九五頁

二

蒙古人は獸乳酒をよく飲み、それ故に酒好きと言われる。然し、元の成立期に於いて彼等の用いた酒は、この獸乳酒だけではない。其の酒の種類は少くない。では、どの樣な酒があつたか。

その筆頭にかかげなくてはならないものは、獸乳酒だけではないとは言え、やはり獸乳酒である。獸乳酒には、馬乳酒の外、黑韃事略に「飲馬乳與牛羊略」[1]とあり、ルブルクは酸つぱい牛乳や酸つぱい羊の乳の事を傳えている。[2]從つて、牛乳酒や羊乳酒もあつたものと思われる。然し何と言つても馬乳酒が第一である。尤も、馬乳酒と言つても一樣ではない。大體それは、需要別に次の二つに大別できよう。其の一つは、王公貴族の上層階級や祭祀用などに供せられるものであり、又他の一つは、一般の蒙古人の每日用いるものである。それ等は生產方法が多少異なつていた。從つて、造られた馬乳酒も多少異り、前者は無色淸澄の纏くなつた一名カラ・クミズとも言われるのに對し、後者卽ち一般の蒙古人の用いた馬乳酒は尙白濁であつた。[3]

この樣に獸乳酒と言つても幾つかが擧げられるが、いずれも彼等の家畜から彼等自身に依つて造られた酒、卽ち、蒙古のいわゆる「地酒」である。所がこれらの獸乳酒は、ただに元の成立期だけにあつたものではなく、旣に匈奴の時代に於いても、[4]また突厥の時代に於いても、[5]更には元帝國時代に於いても、[6]殆んど普遍的に存在していた。しかも又それは、蒙古だけにとどまらずして、廣くユーラシア遊牧社會全般に共通する現象でもあつた。[7]從つて、元の成立期に於いて蒙古人の用いた酒の特色は、この蒙古の地酒には求め難い。むしろ當時の酒の特色は、發展する蒙古民族が他の經濟社會から得る酒にあると言うべきであろう。ほかから得る酒と言つても、後に述べる樣に掠奪等

にも依るものもあるから、輸入酒と言うよりも、假にこれを外來酒と呼ぼう。

では、外來酒にはどんなものがあつたか。ルブルクの東遊記には、蒙哥汗が彼等（ルブルク達）に飲む酒の種類を問うて、『葡萄酒かテラシナ（米から造つた酒）かカラコスモス（前記のカラ・クミズ）か、それともバル（蜜酒）か』と言つたと傳えて居り[8]、又、別の所では、粟酒の事も記している[9]。これらはいずれも、當時實在していた酒を示したものでなければならぬ。即ち、葡萄酒・テラシナ・蜜酒・粟酒（黄酒）等の外來酒があつた事がわかる。これ等の中でも葡萄酒については、例えば黒韃事略にも、「葡萄酒盛以玻璃瓶云々」とあり、『湛然居士集』卷六、西域河中十詠の其の一にも耶律楚材の葡萄酒についてうたつた詩[10]を見出すことができる。恐らく美味しかつたから特に印象に殘つた爲だろう。

次に、以上にかかげた地酒・外來酒に對する需要は、どうであつたかについて若干考察して見よう。假りにそれを『元史』にうかがうならば、太宗紀、十三年十一月庚寅の條に、「還至釐鐵鐔胡蘭山、奥都剌合蠻進酒、帝觀飲、極夜乃罷、辛卯遲明、帝崩于行殿」とあり、又、卷百四十六、耶律楚材傳にも、「帝（太宗）素嗜酒、日與大臣酣飲、楚材屢諫、不聽、乃持酒槽鐵口、進曰麴蘖能腐物、鐵尚如此、況五臟乎云々」とある。つまり、太宗が非常な酒好きであり、非常に酒を飲んだ事を傳えたものであるが、それは太宗だけに見られた現象ではない。例えばドーソンは、成吉思汗が過度の飲酒を戒めたが、一向に其のききめがなかつた事を記している[11]。又ルブルクも、彼等一同が酒を飲む時には、度をはずして飲む者の多い事を傳えて居り[12]、また、蒙哥から葡萄酒を頂いたと聞きつけた連中が、野良犬のように寄り集つて、飲ませろ飲ませろと迫り、其の中には、どこから來たともわからぬ蒙古人も居たと記している[13]。これ等はいずれも、一般の蒙古人も非常に酒を欲しがつた事を示したものである。

どう言う酒が、どれ程、どう言う階層の蒙古人に飲まれたかについての統計はないが、このように欲しがり、そして飲まれた酒の中に、外來酒の含まれていた事は間違いない。しかもこの外來酒は、後で述べる樣に、當時、次第に增加した。そうすると、外來酒の美味しいのにひかれて、從來の地酒の需要は、次第になくなつて行つたのではないかと言う疑問が起るかも知れない。

だが、一概に、外來酒の增加に依つて地酒の需要が驅逐されたとは言えない。なぜならば、成吉思汗は建國に當つて、何ら從來の遊牧社會の傳統的な慣習を變更させる事のない樣につとめ、この原理に基いて立法も定めた程で[14]、彼等の舊習維持の傾向は強く、例えば、世祖の代に至つてもやはり馬乳酒は儀禮用の必需物であり[15]、一般の蒙古人は後で述べる樣に、飲用や信仰による儀禮用の酒は、專らこの馬乳酒に限られていた[16]。從つて、彼等の總需要酒量のパーセンテージに於いて、外來酒の增加にともなつて、馬乳酒等の地酒の需要量の相對的減少を見ることになつたかも知れないが、必ずしもそれで以て、地酒需要量の絶對的減少を斷ずるのは早計で、妥當ではないだろう[17]。

外來酒の增加によつても、地酒の需要が殆んど減少しないと言う事は、つまり、元の成立期に於いて蒙古人の酒に對する需要が、從來より增大した事を意味する。大體それは、外來酒の分だけ增大したと言う事ができよう。

(1) 前漢書卷十九、百官公卿表七上、太僕（秦官）の如淳註に、「名馬酪爲馬酒」とある。だから、當時の酪は單なる獸乳を指したものではなく、それは酒を指したのではないかと思う。

(2) リュブルック東遊記・邦譯六三・七八頁

(3) 又一名カラコスモスとも呼ばれる（リュブルック東遊記・邦譯五九頁）

(4) 江上波夫「ユーラシア古代北方文化」、內田吟風「匈奴史研究」二四五頁

(5) T. Peisker; The Asiatic Background (The Cambridge Medieval History Vol. 1)、隋書・通典

(6) Yule: Marco Polo Vol. 1
(7) ドーソン「蒙古史」邦譯・岩波版上六〇頁、長春眞人西遊記三章、江上波夫・前揭書・九五頁
(8) リュブルック東遊記・邦譯一五〇頁
(9) リュブルック東遊記・邦譯一六一頁
(10) 「寂寞河中府、連甍及萬家、蒲萄親釀酒、把槪看開花、飽啖鵝舌肉、分餐馬首瓜（土產瓜、大如馬首）、人生唯口復、何礙過流沙」とある。（岩村忍・前揭書・五―六頁）
(11) ドーソン「蒙古史」邦譯・岩波版上二九七―二九八頁
(12) リュブルック東遊記・邦譯五七頁
(13) リュブルック東遊記・邦譯一八四頁
(14) F・グルナール「傳記・チンギス汗」邦譯九八頁
(15) ドーソン「蒙古史」邦譯・岩波版上六二―六四頁
(16) 元史、卷七十七、祭祀六、國俗舊禮・新元史、卷八十一、禮志、郊祀上・東洋史研究、第四卷第四、五號一五五頁
(17) 馬乳酒を信仰による禮に用いる事は、現今でも殆んど變つていない（蒙古事情「滿洲事情案內所報告（84）」九七頁）

三

それでは當時の種々の酒は、どうして彼等に供給されたか。それは、地酒と外來酒とで大いに事情を異にする。地酒の場合は自給であるが、後で述べる如き生產關係におかれていた爲、先づ其の貴族乃至は領候えの供給から述べよう。この供給方法は、一言にして述べるならば、それは一般の蒙古人からの現物稅徵收であつたと言えよう。即ち、一定期間領主の營舍え家畜を差し出させ、そこで獸乳酒を造らせた。[17] そして、それは全部領主のものになつた。マルコ・ポーロに依れば、こうして汗は一萬頭の馬乳を得ても、それは彼の家族によつて消費されると言つて

いる。[3] 大體、一般の蒙古人の地酒量の三分の一ぐらい納めていたらしい。[3] 次に一般の蒙古人自身の地酒についてであるが、それは、各バオ（＝家）に於いてそれぞれ自給したものと思われる。ルブルクは、馬の搾乳は男の仕事であり、牛の場合は女だと言つて居り、又、攪拌作業は夜間に行われたらしい。[4] 恐らく、この馬の搾乳と牛の搾乳に男女の別があつた事は、前者、即ち馬乳より造られる酒が宗教的な或る信仰に基いた爲だろう。

彼等は夏に於いては他の飲みものを欲しがらない[5]と言うけれども、こうして生産された獸乳酒に依つて、恐らく其の供給量は、彼等の需要をほぼ充たすことができたものと思われる。然し冬期では、牧草等の關係から獸乳は夏程得られない。從つて、マルコ・ポーロも言つている如く、保存された乾燥乳に水を加えて攪拌し、酸味を帶ばせて飲み[6]、其の不足分を補つたものと思われる。

次に外來酒の場合であるが、これは輸入酒と言う事をさけた點からも推測出來る如く、大體掠奪・貢獻若しくは交易・租稅等の型に依つて得たと言えよう。其の主なものはテラシナと葡萄酒であるが、この供給について大略二つの場合が考えられる。

其の一つは、テラシナの場合に於けるが如く、主として征服後に於いて、彼等の權力に依つて、獲得したものである。當時、テラシナの供給源の第一に考えられるものは金であるが、金は、『金史卷四十九、食貨四』に、「犯私酒麴殺云々」とある所からも、酒が造られていた事は明らかである。所がこの金は、『金史卷五十、食貨五』に、「榷場與敵國互市之所也、皆設場官、嚴厲禁、廣屋宇以通二國之貨、歲之所獲、亦大有助於經用焉」とあり、西夏や西遼と通商して一時非常に榮えていた。[7] この時、蒙古部との交渉もあつた事は確かだが、[8] 資料はこの交渉で酒が蒙古部え送られた事を傳えていない。だが、再三の掠奪に依つて、[9] 恐らく金の酒も蒙古部へもたらされただろう。

それが資料にあらわれてくるのは、金を滅ぼしてその地を支配してからである。例えば、『新元史卷七十二、食貨五、酒醋課』に、「（太宗）八年大都酒課、提舉司設糟房一百所、九年併爲三十所、每所一日所醞、不得過二十五石、十年增三所、至大三年又增、爲五十四所」とあり、又、「官設酒庫」とある樣に、彼等の專賣政策に依つて、[10]中央卽ち彼等の支配者のもとに、次第に多量のテラシナが寄せ集められた。勿論、その以前に、交易もあつたかも知れないが、やはり、主として彼等の權力に依つて獲得したと考えられる。尙、テラシナの供給地は、漢土以外もあつたかも知れないが、[11]資料は殆んど見當らない。

他の一つの供給の型と言うのは、葡萄酒の場合に於けるが如く、主として貢獻若しくは交易に依つて取得したものである。當時葡萄酒の原產地は大體西域が主であつて、西域から供給されただろう事は凡そ推測される。然しマルコ・ポーロは中國の太原府で漢人達が大いに葡萄酒を造り、[12]附近えも運び出していると記して居り、丘處機やルブルクも、中國葡萄の木のあつた事を傳えている。[13]又『唐書』には、「蒲桃酒西域有之、前代或有貢獻、及破高昌收馬乳蒲桃實、於苑中種之、并得其酒法、上自損益造酒、[14]酒成」とあり、石田氏も之を認めて居られる。[15]つまり、唐代に於いて葡萄酒が中國で造られていた事は間違いない。そうすると、中國では唐から宋・元にかけて葡萄酒が造られていたのではないかと思われる。だが、唐末のアラビア商人スレイマンは、中國人は、葡萄酒を全く知らないと言い、[16]これを否定して居る。從つて、恐らく、唐代に於ける葡萄酒釀造は、暫らくして中だるみしたのか、或は禁中の祕法として民間に傳わらなかつた爲か、[17]殆んど發達しなかつたのだろう。所が蒙古人が中國を征服する頃に前後して、再び盛んになり、中國を征服した彼等にそれが供給される樣になつたらしい。元の忽思慧の『飲膳正要』卷三に、「葡萄酒、益氣調中、耐飢强志、酒有數等有西番者、有哈剌火者、有平陽太原者」とあり、中國產

の葡萄酒もあげられている。しかし其の後に、「其味都不及哈剌火者田地酒最佳」[18]とある様に、やはり何と言つても當時の名産地たる西域の、特に Karakhodja 産の葡萄酒が最も最良酒であつたらしい。これらはいずれも、モンゴル政權が通商路の治安維持者であるとせられた飯塚氏の見解[19]から考えられる様に、西方の商業資本の東進とともに、西番や哈剌火の葡萄酒が供給され、又、南方の治安の維持が確立されるにつれて、中國の葡萄酒が供給される様になつたものと見てよいのではなかろうか。篙闊臺等が如何なる商人にも快く資本を貸與した[20]と言うのも、西方から運んで來る珍らしい果物・麝香・葡萄酒等[21]をより多く欲した爲であり、その爲には其の通商路の治安も必要であつた。そしてその通商路が安全になればなる程、商業に天資を有する西域人[22]の活動は活潑になる。だから、この過程に葡萄酒も彼等に供給されたものと思われる。

尙、蜜酒についてもこの後者の場合に於ける供給方法に依つたものではなかろうか。粟酒は北支那の粟から造つた黄酒の事だろうが、ルブルクも唯一ケ所で記しているだけでよくわからない。

(1) ウラヂミルツォフ・前揭書・二六四頁
(2) Yule; Marco Polo Vol. 1. p. 291
(3) リュブルック東遊記・邦譯五九頁
(4) リュブルック東遊記・邦譯五二頁
(5) リュブルック東遊記・邦譯五八頁
(6) Yule; Marco Polo Vol. 1. p. 254
(7) 鄭行巽「中國商業史」一三四頁
(8) 支那民族・第二篇（村上正二）一三七頁
(9) ドーソン「蒙古史」邦譯・第一編第四章

(10) 世界歴史大系七、東洋中世史第四篇一八〇頁
(11) 長春眞人西遊記に天山山脈の東北邊で時禾麥初熟、皆賴泉水灌溉云々と記しているから、或はテラシナも造つたかも知れぬ。
(12) A. C. Moule; Marco Polo Vol. 1. p. 257
(13) 長春眞人西遊記に至南山……平地頗多、以農桑爲務、釀蒲萄爲酒、果實與中國同とあり、ルブルクも（前揭書、一七十頁）支那では葡萄を栽培し始めたと言つている。
(14) 石田幹之助「長安の春」一九五頁
(15) 太平御覽、卷第八百四十四、飲食部二
(16) 張星烺「中西交通史料匯篇」第四册、一六八—一六九頁
(17) 新疆圖志、卷二に、太宗破高昌、收馬乳蒲萄、種於苑中、併得其酒法、綠色芳香酷烈、當時詩人吟者至此之日霹瓊漿、惜禁中祕法、民間無從得之とあるから、或はひそかに造つていたかも知れない。
(18) 岩村忍「蒙古史雜考」七頁
(19) 飯塚浩二「世界史に於ける東洋社會」其一章八節
(20) ドーソン「蒙古史」邦譯・岩波版下六六頁
(21) 岩村忍「蒙古の歐州遠征」一五一頁
(22) 布施知足「イランと支那文化」九頁

四

では、これらの種々の外來酒が蒙古人の手に入つてから、どの樣に分配され消費されたかについて考察しよう。これの考察に當つては、先づ當時の社會經濟的構成について見る必要があろうが、これを簡單に處理する事は却つて誤解を招く恐れもある。だが、元の成立は、殆んど斷え間のない襲擊、掠奪、戰爭に依つて始まつている。從つ

て、從來の氏の長・氏人・奴隷から成つた諸氏族は、戰時態勢として種々の結合或は分離が必要であつた。所が、そうする事は、血緣關係の純潔を保とうとする彼等の從來からの努力[1]も空しく、次第に、個人主義的遊牧經濟の土壤の上に成長したステップ氏族的族制の形成となつた。[2] しかも、この過程乃至はこの發展は、ネケルの出現[3]等に依つて、氏族制の分解を早め、未熟な、特種な型ではあるが、そこには封建諸關係が芽生えてくる。例えば、家畜等の持主が領主ではなくて一般の蒙古人達の私有物となり、[4] この一般の蒙古人達がさきに地酒供給の所で述べた樣に、領主に對して現物稅を納め、これ等に依つて領主の生活を支えた。從つて、ウラヂミルツォフも、當時の統一された蒙古社會を封建制と規定している。[5] しかし、遊牧社會であるから一般の蒙古人は、領主の指圖のままに遊牧しなければならないから、[6] 農耕社會の場合とは自づから異つたものである事は注意しなければならない。勿論、封建社會えの移行は緩慢であつたが、元の成立期と言えば、大體この封建社會えの緩慢な移行期に當るのではなかろうか。

從つて、まだ貴族社會の名殘りも強い當時に於いて、外來酒、例えば葡萄酒の分配も、やはり、非常に貴族的な性格を殘していると言えよう。さきに引用の、たまたま蒙哥から頂いた葡萄酒に關して、ルブルクは、非常に欲しがつて集つてくる蒙古人に對して、其の後で與えたとも與えなかつたとも言はないで、とにかく寄り集つてくる連中がうるさいから、葡萄酒を頂く事は却つて迷惑だとつけ加えている。[7] 尙、他でもルブルクは、葡萄酒に關して多くの記事を擧げているが、それ等はいずれも、使者等に對應した時のことで、一般の蒙古人に分配した事などに關する何の記事もかかげていない。又、元代の類書たる『事文類聚翰墨全書』・『事林廣記』・『居家心用事類全集』等の飲食門に於いてさえも、全く葡萄酒[8]に關する記事は見出されない。從つて、葡萄酒は元の成立期から元代にかけて、大體一般の蒙古人に分配されなかつたものと思われる。所が其の反面、例えば、『元史』世祖の紀、至元十三年九

月己亥の條には、「享于太廟常饌外、益野豕、鹿、羊、蒲萄酒」とあり、又、至元二十八年の條には、「宮城中、建蒲萄酒室」とある。これは、當時、葡萄酒は非常に珍重なものとされていながらも、貴族乃至は領主の消費が次第に增加していつた事を示したものである。そうすると、葡萄酒は殆んど一般の蒙古人に分配されないで、大體貴族乃至は領主達だけにあてがわれた事がわかる。

尙、その他の外來酒に於いても、多分に其の傾向があつたのではなかろうか。尤も、テラシナの如きは、當時の前後を通じて、葡萄酒程には珍重視されていないから、掠奪等の時には、或は戰功あつたネケル達を中心として、多少は一般の蒙古人にも分配されたかも知れないが[9]、ウラヂミルツォフは、元の成立期に於ける一般の蒙古人の暮らしが非常に貧しくて、生活必需品以外の何物をも欲する程の餘裕のなかつた事を指摘している[10]。だから、恐らく、テラシナ等の外來酒も、一般の蒙古人には殆んど分配されていなかつたものと見る方が妥當ではなかろうか。

そうすると、種々の外來酒が次第に增大したと言つても、それは、貴族乃至は領主達に當てはまるだけで、一般の蒙古人達に對しては、殆んど其の影響がなかつた事になる。と言う事は、つまり、外來酒の殆んどを貴族乃至は領主達に依つて搾取された事に他ならない。從つて、元の成立期に於いて外來酒が次第に增加すれば增加する程、酒の消費の面において階級間の優劣の差をはじめ、貧富の差が次第に大きくなり、貴族乃至は領主達が美味しい葡萄酒や蜜酒をのんで、或はさきにも引用した、『元史太宗紀』や、卷百四十六の『耶律楚材傳』にある樣に爛醉しているのに對し、一般の蒙古人達は、やはり、從來の獸乳酒のみに甘んじなければならなかつた。當然そこには、かれらの間に不滿が生じたことが推想されよう。しかし、外來酒を得る爲には、先づ支配的な地位につかなければならない。だから、ウラヂミツルォフも傳えている樣に、外來酒などの珍重物の分配を受けようとする者達が、よ

り支配的な地位に就こうとして、互いに鬪爭した。[11]

(1) ウラヂミルツォフ・前掲書・一一七頁
(2) ウラヂミルツォフ・前掲書・一七〇頁
(3) ネケルとは主君―ノヤンの臣下でもなく、傭人でもなく『適法の』主君となつた首領に對し、外國での獲物や美しい娘や良馬を獻ずる義務のある自由な戰士で、首領から采領中の一定數の遊牧アイルを得、自ら其の統治者となつた。（ウラヂミルツォフ・前掲書・二〇〇―二三九頁）
(4) ウラヂミルツォフ・前掲書・二六三頁
(5) ウラヂミルツォフ・前掲書・二五六頁
(6) ウラヂミルツォフ・前掲書・二六四頁
(7) リュブルック東遊記・邦譯一八四頁
(8) 岩村忍「蒙古史雜考」六頁
(9) チンギス・ハガンは軍律を公布し、『敵人に勝つたなら財貨の所に立寄つて貪つてはならぬ。勝つて了つたならば其の財貨は我々のものであるぞ。我々はお互に分配するのだ。』と言つて居る。（蒙古の祕史・前掲書・一二〇頁）
(10) ウラヂミルツォフ・前掲書・一九四頁
(11) 入酒だけの分配を得ようとしたのではないが、とにかく何でもより多くの分配を得ようとして互に爭つた。ウラヂミルツォフ・前掲書・一六九頁

五

外來酒の不平等な分配は、消費酒を階級別的なものにする傾向があつたとは言え、資料は、彼等が一緒に酒を用いる事についてのものが多い。例えば、ルブルクは、彼等が集つて酒を飲む時の事を傳えて、先づ始めに主人の頭

上の像に酒をそそぎ、順々に他の像に酒をそそぎかけた後で、下僕がなみなみと酒をたたえた椀をもつて外に出て、膝を曲げて三度禮拜しながら三度酒をこぼして、火の神えの禮拜をなし、次に東の空氣の神に向つて同じことをし、西の水の神に向つても同じことをします。そして最後に、北に向つて酒をそそぎますが、これは死人の靈を拜むのです。主人が酒の椀を取り上げて飲む時は、はじめ少しばかり椀を傾けて、地上にこぼし、若し、それが馬上であつたら馬の首にこぼします。下男が屋外に酒をこぼして歸つてくると、二人の下男が別々の盆椀の酒のをのせて、主人と主婦にすすめます。若し、主人が數名の夫人を持つている場合は云々すると言つている。[1] これは、主人を中心として酒を用いる場合について示したものである。

この樣に、酒を用いる場合に儀禮らしいものが附隨した事については、資料の殆んどに共通している。例えば蒙古の祕史には、嫁たちに嫁としての禮を行わせ、酒盛をし、馬頭琴を彈かせ、盞を取つて祀つたとあり、[2]『新元史卷八十一、禮志一、郊祀上』には、「(憲宗)七年駐蹕於軍腦兒、灑馬乳祭天」とあり、既に述べた樣に、當時、馬乳酒は儀禮用の必需物であつた所からも、それは、酒と禮とが全く密接不離の關係におかれていたのに違いない。[3]

では、この酒を用いるのについて、酒と密接不離の關係におかれたと言える儀禮とは、如何なるものであつたか。それは、さきのルブルクの傳える所の飲む前の儀禮にしても、『新元史卷八十一、禮志一、郊祀上』の場合に於いても、又、其の他、『元史』卷七十二以下の、祭祀の條に於ける多くの儀禮も、結局、シヤマニズム乃至はシヤマニズムから生じた儀禮と言えよう。

それでは、シヤマニズム乃至はシヤマニズムから生じた儀禮とは、如何なる性格のものであつたか。少くとも當時に於いては、それは、例えば『元史卷七十七、祭祀六、國俗舊禮』に、「再拜告天、又呼太祖成吉思御名、而祝

之日、托天皇帝福蔭、年年祭祭者、禮畢云々」とある樣に、『土地の主』なる觀念は、現存する領主にも連なるものがあつた。從つて、ドーソンも傳えている樣に、一般の蒙古人は誰も、部長の權力を無限のものとして尊敬した[4]のに不思議はない。つまり、シャマニズムは、そこ迄政治の中にとけ込んでいたのであり、神權と政權とが密接な關係におかれていた[5]事を示したものと言えよう。こう言う點から、シャマニズム乃至はシャマニズムから生じた種々の儀禮は、當時の政權を確立・維持する爲のものと、相通ずるものがあつたものと考えられる。

しかも、それは、祭祀に於けるだけの問題ではなく、さきのルブルクの引用に依つてもわかる樣に、家の主人を中心に酒を用いる場合にも、この政權を確立・維持する爲のものと相通ずる儀禮が、必ず附隨した。つまりそれは、政權を確立・維持する爲のものと相通ずる儀禮が、廣く深くすべての蒙古人の間に普及していた事を示したものと見てよいようである。

こう見て來ると、一方では、外來酒の增加にしたがつて、貴族乃至は領主達の消費する酒の量的變化や質的變化にともない、貴族乃至は領主達の消費する酒と、一般の蒙古人達の消費する酒との間において、貧富の差の增大が見られ、他方では、それらの消費過程に於いて、政權を確立・維持する爲の儀禮が必ず附隨していた事がわかる。所がこう言う現象は、當時の家畜の增加[6]、つまり、當時の生產力の增加に對する蒙古社會の內部的矛盾のあらわれではなかろうか。

尤も、酒の問題だけをとらえて、元の成立期に於ける蒙古社會の內部的矛盾が、完全に考察出來るものでもなく、又、酒の問題の考察だけに蒙古社會の內部的矛盾がうかがわれるものでもなかろう。蒙古社會の內部的矛盾を完全に見きわめる爲には、尙、あらゆる部門の考察をなし、更に檢討しなければならないが、それは今後の研究にまつ

として、此の小稿を結びたい。

(1) リュブルック東遊記・邦譯五二頁
(2) 蒙古の祕史・前掲同書・一七〇頁
(3) 昔から諸飲食と祭祀と禮の關係の極めて密接な事は、どこでも大體共通している（山崎百治・前掲同書・一二八頁）
(4) ドーソン「蒙古史」邦譯・岩波版上六四頁
(5) F・グルーナル・前掲書・八八―一一六頁
(6) ウラヂミルツォフ・前掲同書・九三―九四頁

執筆者紹介

穗積文雄　京都大學教授
伊藤幸一　京都大學大學院特別奬學生
三島康雄　京都大學大學院特別奬學生
大藪輝雄　京都大學大學院學生